

シベリウス・アカデミーの教育システム
〈シベリウス・アカデミーのカリキュラムと学生支援体制について：
職業音楽家を育てるためのプログラムの提案〉

The Education System of Sibelius Academy
〈The curriculum and students carrier support system of the Academy：
the successful programs to raise the professional musicians〉

小林 聡, 壬生千恵子

KOBAYASHI Akira, MIBU Chieko

Abstract

Under the effects of the several changes of Policy for Higher Education, especially of Bologna Declaration on professional music training in Europe, Sibelius Academy has kept its status as a prestigious international music university, providing a high standard of education with its strong areas. Its activities cross borders and are implemented in close interaction with the surrounding society alike. This article reviews the curriculum and carrier support system of Sibelius Academy, as well as its outline and special focus and strategy. The findings suggest the key to concrete the ideal circumstances as a successful music institute with a whole flexible operation system.

はじめに

フィンランド国立シベリウス・アカデミー (The Sibelius Academy) は、国際的にも最も有名な音楽大学の一つであり、数多くの優秀な音楽家を輩出してきている。殊に1970年代頃からの国際コンクール等での在学学生、卒業生の活躍はめざましい。シベリウス・アカデミー (以下アカデミー) が世界的な音楽大学としてその高いレベルを維持し続けているのには、アカデミーが学生達に〈音楽を学ぶのに適した環境〉を総合的に提供していることが大きい。アカデミーは3つのキャンパスからなり、これらのうちの2つはヘルシンキの中心地に位置し、フィンランディア・ホールやオペラ・ハウスには徒歩でゆける範囲にある。学内のホールでも毎日のように音楽会が催されている。また、学内には400台を超えるスタンウェイ・グランドがあり、週末も練習室は学生に解放されている。しかしながら、これら目に見える条件の良さのみがその理想的環境を可能にしているわけではない。

フィンランドは、ヨーロッパの北に位置し、西欧とは文化的にも異なるものを育てて来た。現在の人口も約520万人程度で、過去内外に大きな影響力を持ったことは無かったが、自国の伝統的な文化を重んじながら西欧の文化を効果的に取り入れ、人間味のある近代的な文化を築いてきた。現在では、

ヨーロッパ先進国の一角をなしている。このことは地理的にも文化的にもヨーロッパの中心から遠いところに住む人たちが、自国の文化レベルを高く保つために、常に外から新しいものを学び続けてきた結果であろう。現在、フィンランドの小・中・高の学力レベルは世界最高である⁽¹⁾こともフィンランドの国策とその実現力を示すものである。フィンランド出身で世界的に活躍している音楽家は多いが、彼らの作品や演奏から感じられるある種の個性や新鮮さと、高い技術レベルや新鮮な解釈は、フィンランドが独自の高い文化を育ててきたことと無縁ではない。一方、日本で西洋音楽の教育が始められたのは1879年（明治12年）、文部省に伊沢修二を御用掛とする音楽取調掛が設立されてからであり、我が国における西洋音楽の歴史はまだ130年に満たない。しかしながら、第二次世界大戦後、優秀な音楽家を世界に排出し続けているのは周知の事実であり、日本における西洋音楽教育はあらゆる意味でその準備期間をようやく終えたといってもよいだろう。

本稿の目的は、教育機関の制度改革期にあたって、音楽教育において素晴らしい業績を上げ続けているアカデミーのカリキュラムと学生支援体制を調査・研究し、本学をはじめとする日本の音楽大学に職業音楽家を育てるためのより効果的なプログラムを提案することである。その第1稿として、ここではカリキュラムを中心に考察を進める。

1. シベリウス・アカデミー

●シベリウス・アカデミーの歴史⁽²⁾

アカデミーは、1882年に創立され、フィンランドの首都ヘルシンキの中央に位置する国立の音楽教育機関である。創立当時はヘルシンキ音楽院（Music Institute of Helsinki）と呼ばれており、1939年に現在の名称となった。アカデミー創立以前のフィンランドでは、音楽教育の機会は乏しく⁽³⁾、音楽家を志す若者はドイツ、オーストリア、フランスへ留学するのが常であった為、アカデミーは国内の音楽教育と演奏会開催の機関という二つの目的をもって設立された。フィンランドの国民的作曲家であるジャン・シベリウス（Jean Sibelius 1865～1957）⁽⁴⁾は1885年から1890年にかけてアカデミー（当時のヘルシンキ音楽院）でヴァイオリンと作曲を学び、在学中に彼の作品が学内の音楽会でたびたび演奏された記録が残っている。卒業後、1892年から1890年まで音楽理論を教え、後には作曲も指導している。アカデミーは1980年に国立の音楽教育機関となり、教育省（Ministry of education）の管理のもと、他の国立大学と同様のシステムを取り入れることとなった。これに伴い、アカデミーの授与する学位と管理運営方法が改正され、フィンランド唯一の国立の音楽大学として、国内の他の大学群と同等のステータスを持つことになる。さらに、1996年には高等教育機関（Higher education institute）の認定を受け、ヨーロッパの高等教育政策において、現在必要不可欠な教育機関の一つとなっている。

アカデミーは、現在スカンジナビアで最大規模の音楽大学であるだけでなく、ヨーロッパの音楽大学の中でも有数のマンモス校でもある。しかしながら、前述の通り、西欧諸国との繋がりを文化的に持ちやすい環境を有していたとは決していえなかったことが、アカデミーの前身であるヘルシンキ音楽院の設立時の状況からうかがい知ることができる。西欧の芸術音楽の歴史の中で、スカンジナビア諸国はいずれも辺境の地であった時代を長く持つが、中でもフィンランドはその地理的条件により、

ロシア文化と西欧文化の両方からの遠隔地にあたり、さらに母国語であるフィンランド語が周囲国とは異なる言語体系にあるため、スカンジナビア内でも文化的相違が比較的大きい。音楽教育機関としてのアカデミーの発展と現在の国際的な地位は、20世紀の近代化やそれに続くグローバル化、IT化などの恩恵を受けた結果というよりもむしろ、明確なビジョンと戦略をもって時代を使いこなす、教育機関としての理想の実現化に力を注いできた結果と考えることができるだろう。西欧の芸術音楽という括りの中で、過去に文化大国になっていないことを利点として生かして理念へと結びつけていったこと、そしてそれを急進的にならずに革新的に具現化していくことのできた風土の柔軟性も、見落とすことのできない重要なファクターであろう。

●使命と目的

アカデミーは、学校案内の中で次のように謳っている。「シベリウス・アカデミーの使命と目的は、すべての音楽文化を育成し進化させることである。フィンランドの芸術大学として、国際的な環境で機能し、芸術的活動・研究・共同研究のための優れた環境を作り出すことである。」フィンランドの唯一の音楽大学であることから、後述するEUの高等教育機関認定以前よりアカデミーは国の手厚い助成を受け、国の文化政策や他の文化プロジェクトと一体となった理想的な創造・教育環境を模索、実現し続けてきた。図書館の充実とIT化を含む利便性の追求、教育者及び学生の芸術活動の場の積極的な展開⁽⁵⁾（第2稿で扱う予定）、教育者の十分な活動及び研究を可能にするための労働基準、学生の授業料負担がないこと⁽⁶⁾、などもその一例としてあげることができるであろう。また、ヘルシンキの中心に位置する、という立地の良さも、様々な点でこの教育機関に優位性を与えている。

近年では、ヘルシンキ・ミュージック・センター（Helsinki Music Centre）の設設計画が大きな意味を持つプロジェクトである。2009年完成予定のこのセンターは、フィンランド・ラジオ・シンフォニー・オーケストラ（Finnish Radio Symphony Orchestra）、ヘルシンキ交響楽団（the Helsinki Philharmonic Orchestra）との共同プロジェクトで、アカデミーを含め3つの組織が同じ建物の中に入るものである。教育機関と二つのプロのオーケストラ、そして芸術文化施設が一体化するこの試みは、より密度の濃い相互作用をもって効果的な音楽文化の育成に寄与していくものと考えられる。また、アカデミーにとっては、社会との一層の繋がりは連続性を実現するだけでなく、研究・芸術活動機関として「音楽文化を進化させる」という使命において大きな役割を果たすものとして期待されている。

2. ポローニャ・プロセスとシベリウス・アカデミー

●ヨーロッパ諸国の高等教育協力

超国家機関としての欧州共同体（European Communities, EC）がおこなっていた活動プログラムは、その本来の政策の根拠から経済的な理由をもつ活動内容に対象が限られていたが、1970年代には高等教育領域への関与が見られるようになった。1976年に始められた「ジョイント・スタディ・プログラム」（Joint Study Programme）は、ヨーロッパの学生、教職員の交流を図る試行計画で、「エラスムス・

プログラム」(ERASMUS Programme)の前身となったものである。約10年後の1987年に実施された「エラスムス・プログラム」では、従来の「大学」(University)だけでなく、高等教育機関と認められた大学外の教育機関もその対象に含まれることになり、「大学」のシステムを持たない数多くのヨーロッパの音楽専門教育機関にとっては、この時点で制度として影響力をもつことになった。しかしながら、芸術教育という特異な領域においては、個人レベルで国家を超えた交流・教育が行われてきた歴史的経緯があり、このプログラムの推進によって留学生数の増加が見られたとしても、同時に履修科目認定のための評価基準の問題や、時期を同じくしてヨーロッパでとりいれられた大学の外部評価制度など、多くの芸術教育機関にとっては、一元化しづらい問題を多く抱えることになったと考える方が妥当であろう。(外部評価に関しては、1980年代後半にフランス、イギリスが先鞭を切ったのを始めとして、1990年以降に北欧の少規模国が導入、フィンランドもこの時期に外部評価を取り入れている。)

1993年に欧州連合(European Union, EU)が発足すると、より積極的な超国家的教育政策が打ち出されるようになる。その基幹となったのは、マーストリヒト条約(1992年)であり、既存の「エラスムス・プログラム」は普通教育と高等教育の両方に関与する「ソクラテス」(SOCRATES)という新たなプログラムの中に入るようになって残されることになった。この「ソクラテス/エラスムス」によって、より広範囲な学生と教員の流動化や、それまでの学部主体の交流から大学中央本部組織主体の交流へと、枠組みが広がられている。フィンランドは1995年にEUに加盟し、アカデミーは翌1996年に、高等教育気機関の認定を受けて、このシステムとの関わりが始まっている。(フィンランドは、加盟国の国法との兼ね合いに関して、この時点では独自の解釈をとるという立場をとっている。)

続く、1997年の欧州単位互換制度(European Credit Transfer System, ECTS)の導入及び1999年のボローニャ宣言(Bologna Declaration)によって、欧州は2010年までにヨーロッパ高等教育圏(European Higher Education Area)の達成を目指すことになるが、この改革のプロセスのなかで、教育の中身とシステム自体に対して慎重な姿勢をとり続けてきたアカデミーも2005年8月より大きな制度改革を行うことになった。ここでの一番大きな制度改革は、ボローニャ宣言の中に取り込まれている2サイクル制(two cycle degree system)の導入である。アカデミーではそれまで基本的に6年間を修士課程習得のための期間(undergraduate)とし、その上に博士課程(post graduate)を設置していたが、このボローニャ・プロセスによって、3年間の学士(BA)と、2.5年間の修士課程とに分けることとし、5.5年のうちに修業することと規定している。2008年までをその経過措置とし、ECTS制度も同時に取り入れている。アカデミーにとって始まったばかりのこの制度は、他のヨーロッパの大学の過去の経緯と同様、学生の交流、つまり全体の学生数と留学生との比率において大きな変化をもたらしているとは言いえないが、過去五年間の「ソクラテス/エラスムス」を利用した留学生数は、徐々に増加している。(次頁参照)

また、近年の世界的な傾向に準じて、アカデミーにおいても Doctoral Degree の充実をこの改革の目標の一つに設定している。

・ソクラテス／エラスムス制度を使った交換留学生の数の変化（過去5年間）

2002年—2003年	40名
2003年—2004年	32名
2004年—2005年	42名
2005年—2006年	61名
2006年—2007年	50名

・2005年度の同受入留学生数と送り出し学生数

	受け入れ	送り出し
ソクラテス／エラスムス	37名	32名
ノードプラス ⁽⁷⁾	7名	9名
その他	6名	30名

・Doctral Study 取得者の経緯（過去5年間）

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
Licentiate of Music	7名	5名	1名	5名	1名	4名
Doctor of Music	3名	6名	8名	9名	5名	11名

アカデミーは現在、全学生に学費の負担を課していない。今後、アジア地域からの留学生については学費負担が考慮されているとの旨が発表されているが、EU内の学生には今後も課さない方針で進められている。「ソクラテス／エラスムス」制度利用の学生は基本的に短期留学（1年）であり、学費は制度が負担し学生の学費負担は無い。EU内で財政難により学生の学費負担を検討している地域や大学が出てきている現在の状況を考えると、通貨を同じくするという条件のもとでアカデミーが学費無料のシステムを貫いていけることは、EU内の教育機関としての優位性の一つとなりうるだろう。そしてその可否は文化・教育政策に負うところとなる。また、この20年間アジアからの留学生獲得に大きく成功してきたのは他国に先立って経営危機を迎えたアメリカの大学であるが、ヨーロッパが一つの高等教育文化圏形成に成功し、単位互換制度による国を跨いだ流動的修学の可能性が確実なものとなった場合には⁽⁸⁾、学位取得目的の留学生にとっても、魅力的なシステムとなることだろう。⁽⁹⁾ 解りやすいカリキュラムと教育内容の提示は必要不可欠なものである。

3. カリキュラム

●教育機構

アカデミック・イヤーは8月1日に始まり、7月31日に終了する。2006年度の授業期間は下記の通りである。授業開講期間は学長によって定められる。

秋 学 期 2006年9月6日～12月20日（15週間）

春学期 2007年1月8日～3月31日(15週間)

イースタン休暇 4月5日～4月11日

アカデミーでは、夏学期は無いが、6月と8月にいくつかのコースが開講される。7月中は学校が閉鎖される。

●学生の受け入れについて

アカデミーは下記の学生を受け入れている。

1. 修士または学士の学位習得を目指す学生。
2. 博士課程に在籍し、Licentiate of Music、あるいは Doctor of Music を目指す学生。
3. 博士課程の準備をする学生。
4. オープン・ユニヴァーシティの学生。
5. ジュニア・アカデミーの学生
6. 外国からの交換留学生で大学間の交換プログラム協定に基づく学生とシベリウス・アカデミーによって承認されたスカラシップ・プログラムに従う学生。

●学位の構成

アカデミーで授与する学位は以下の4種類である。

1. Bachelor of Music (BMus)

180ECTS単位、学部によって若干異なるがおおよそ以下のような単位が必修となる。

専攻科目90ECTS単位。専攻関連科目40ECTS単位。語学8ECTS単位。選択科目10ECTS単位

2. Master of Music (MMus)

330単位、あるいは Bachelor の上に150単位。学部によって若干異なるが、Bachelor of Music 取得後、おおよそ以下のような単位が必修となる。専攻科目100単位、選択科目30単位を取得し、かつ合計で180ECTS単位を取得する。

3. Doctoral Study Licentiate of Music (LMus : Master 取得後の Doctoral Study の Doctor の一段階前の学位) と Doctor of Music (DMus)⁽¹⁰⁾

Doctoral Study は次の三つのオプションに分かれる :

- a) Arts Program
- b) Research Program
- c) Applied Study Program

Licentiate of Music, LMus : 150単位。

Doctor of Music, DMus : アカデミーが授与する最高の学位であり、240単位あるいは Licentiate of Music の上に150単位。

●学位プログラム

Bachelor of Music Degree と Master of Music Degree を取得しようとする学生はアカデミーの各学部で提供される学位プログラムで修学することを許可され、そのプログラムに従って修学する権利を有する。学位プログラムは研究の傾向あるいはせんう楽器群によって分かれている。学位プログラムは次のとおりである。

教会音楽の学位プログラム（ヘルシンキ）

- ・ ルター派の福音書の研究（教会音楽学部で指導を受ける）

教会音楽の学位プログラム（クオピオ）

- ・ ルター派の福音書の研究（クオピオ・キャンパスで指導を受ける）

作曲と音楽理論の学位プログラム（作曲理論学部で指導を受ける）

- ・ 作曲の研究
- ・ 音楽理論の研究

民俗音楽の学位プログラム（民俗音楽学部で指導を受ける）

ジャズの学位プログラム（ジャズ音楽学部で指導を受ける）

- ・ 楽器奏法の研究
- ・ 作曲の研究

オーケストラ・合唱指揮の学位プログラム（管弦打楽器学部の指導を受ける）

- ・ 合唱指揮の研究
- ・ オーケストラ指揮の研究

音楽教育の学位プログラム（音楽教育学部で指導を受ける）

ミュージック・テクノロジーの学位プログラム（ミュージック・テクノロジーで指導を受ける）

演奏の学位プログラム

- ・ ピアノ奏法の研究
- ・ フォルテピアノ奏法の研究
- ・ アコーディオン奏法の研究
- ・ ギター奏法の研究
- ・ カンテレ（フィンランドの民族楽器）奏法の研究
（ピアノ音楽学部で指導を受ける）
- ・ 管弦打楽器の奏法の研究
- ・ ハープ奏法の研究
- ・ 古楽器奏法の研究
（管弦打楽器学部で学ぶ）
- ・ オルガン楽器群 オルガンの奏法の研究
- ・ オルガン楽器群 クラヴコード奏法の研究

声楽の学位プログラム（声楽学部で学ぶ）
アーツ・マネジメントの研究プログラム

●アカデミーのECTSの扱い⁽¹¹⁾

アカデミーで修得される単位はECTS単位によって量られる。

- ・学生の修学量はECTS欧州単位互換制度によって量られ、コースに必要な単位数が定められている。
- ・1年間に1600時間の修学が要求され、ECTS60単位の範囲で、1単位は26.7時間に相当する。
- ・学生の1年間の1600時間の修学量はコースへの参加と独立した修学、自習を含む。2005年8月1日以降、旧コースはECTS単位制度に合うように次のように修正されている。（2006年現在）
コースの期間中に出席すべきレッスンの回数は、ほとんどの部分で影響を受けない。
決められたコースに要求される修学量（練習、宿題、作品、試験に向けての学習等）は評価される。

時間数によって表された学習評価は、コースの説明に書き加えることができる。

出席すべきレッスンの回数と独立した学修と自習は合計される。

合計に一致する単位数はコースの単位数と同じである。

アカデミーの成績証明書は旧制度の「修学週間」単位とECTS単位の両方ですべてのコースを表示している。必要な場合には、旧制度の「修学週間」単位による成績証明書を受け取ることも可能である。

●使用される言語

授業では主にフィンランド語が使用されるが、フィンランド語をうまく話せないマスターの学生もたくさん学んでいる。教授陣のほとんどは英語を話し、個人レッスンはしばしばフィンランド語以外の言語でも行われている。EU/ETA 諸国からの志願者は語学能力を証明する必要は無いが、EU/ETA諸国以外からの志願者でフィンランド語かスウェーデン語の知識の無いものは、英語の能力を証明しなければならない。⁽¹²⁾

●語学教育

アカデミーにおける語学教育は作曲理論学部との合同チームが行っている。このチームの主な役目はフィンランドの公用語と大学学位プログラムで必要とされる外国語（英語）による教育を提供することである。首都周辺の他大学とのめざましい協力により、他の言語によるコースも開かれている。これらのコースにはフランス語、ドイツ語、イタリア語の音楽科用初心者コースの他、留学生向けのフィンランドの言語と文化のコースも開講されている。語学コースの目的は、学生に彼らが学修に必要な語学力と彼らの後の仕事に必要な語学力を提供することである。音楽的な環境と現実的な生活のコミュニケーションにおける問題と状況に基づいて、内容とティーチングメソッドが作成されている。

4. ジュニア・アカデミー

ジュニア・アカデミーは1884年に創立され、才能のある子供達に門戸を開いている。生徒達は各自のプログラムで修学を進める。ジュニア・アカデミーの授業は週末に行われ、130名の生徒のうちおよそ半分は児童で大ヘルシンキ圏の外から通っている。教授陣は彼らの多くに独奏楽器専攻の学生達と同じような方法で指導し、週2時間のレッスンが行われている。オーケストラ・スタディ、室内楽、音楽理論も開講され、作曲、ジャズ、民俗音楽も副科目として受講可能である。

1年間の授業料は340ユーロ、半年間の授業料は170ユーロである。

5. 教育システムの柔軟性

2005年の学位プログラムの改革に伴って、アカデミーではより柔軟な教育システムの構築が進められている。

●個別研究プラン (Individual Study Plans)

学生により受講科目選択の自由を与えるのもので、各学生が担当の教官とともに希望する研究・受講プランを個別に作成し、アカデミーの認定を受けて研究を始める制度。モデル・プランも提示されるが、基本的には個人個人にゆだねられ、年に一回見直しが入られる。修業効率の良さやオーダーメイドなプランが可能になるだけでなく、修学に対する学生の意欲や責任感がより強くなることが期待されている。また年次ごとの作成が可能であることは、学生の流動性の確保とも関連がある。

●運営管理と人事～柔軟な教育システムを支える為に～

アカデミー発行のストラテジー2012⁽¹³⁾によれば、Degree プログラムの改革とともに、新しい学科の設置や Doctoral プログラムのより一層の充実が計画されている。それに伴って教職員編成の大きな見直しや、新しい職務の創設と雇用が予定されているが、ここには、いかなる変化・改革によっても、教職員の労働環境が損なわれないように十分留意することが謳われている。新しい学科増設に対応するための教授職の増加、留学生の増加に対応する外国人教員職や運営の為にスタッフ設置、あるいは講師 (Lecturer) の減少、フルタイムで就業する Doctoral degree の学生の為に新しいポスト (assistant, researcher) の増設など、雇用体制の様々な変化が予定されており、いずれもプログラムの実現に必要な役割、労働時間数から相当数を割り当てていくとなっている。

必要な時期に必要な管理体制と人事体制をとれることは、アカデミーの特色のひとつである。教職員は基本的に任期制をとっているが、その間にも従事者が芸術活動や研究活動を続けられる体制が管理されていること、またその活動に応じて必要な休暇を得られる制度を導入していることで、労使ともに良い意味での人材の流動化を可能にしている。

第1稿の終わりに

本稿の執筆は、小林聡（作曲家・本学教員）と壬生千恵子（音楽研究者・音楽プロテューサー・元本学大学院非常勤講師）が共同で行った。執筆者の一人、小林は、1996年の4月から9月にかけて、文

部省在外研修員としてアカデミーに在籍し、現代のフィンランド音楽を研究し、その後もアカデミーやスタッフやフィンランドの芸術家との交流を続けている。もう一人の執筆者、壬生は、学生時代から音楽プロデューサーとして活躍し、世界各地の音楽祭等を視察、近年はアカデミーの包括的な学生支援システムに興味を持ち、アカデミーのスタッフとの交流を続けている。

1996年に半年間アカデミーに在籍した当時の小林にとって、アカデミーの学生達が恵まれた環境の中で生き生きと学んでいたことはとても印象的であった。現職の教職員達の音楽家としての活動に市中で触れる機会に恵まれ、キャンパスは国際色豊かで、カリキュラムは魅力的であり、学生が職業音楽家として社会との接点を持っていく機会に溢れていた。当時親しくしていた作曲家の学生達や若い作曲家達の多くが、今では国際的な作曲家に成長し活躍の場を大きく広げている。⁽¹⁴⁾ 高度な教育内容の実践のみならず、施設の充実、学内演奏会の多さ、音楽関連情報へのアクセスの良さ、早期の学内IT化など、ハード・ソフト両面が複合的に機能していくことが、音楽教育環境を創造的かつ実践的なものにするために重視されている。

優れた演奏家のみならず、多くの国際的な作曲家を輩出していることは、アカデミーの優れた教育のもたらした大きな資産の一つであり、その設立当初からの理念、「単なる音楽学校ではなく、演奏と音楽創造が教育の中で相互作用をもたらす場所」⁽¹⁵⁾ として、機能してきた証明といえるだろう。そして、それを実現するための前提となるのが、柔軟な教育体制と学生支援である。第2稿では、アカデミーの学生支援体制に焦点を当て、どのようにしてアカデミーが現役の学生や卒業生のキャリア・サポートをし、国際的な音楽家の輩出に寄与しているのかを考えていきたい。

本年1月に、小林と壬生は、アカデミーを訪問し、アドミニストレイターのAnna Krohn氏からアカデミーの学生支援体制等について詳しいお話を伺った。その後も彼女には本稿の執筆にご協力いただいている。また、小林と壬生の友人であり、アカデミーのプランナーである、日本人作曲家の菅木真治氏にもご協力いただいていた。Anna Krohn氏と菅木真治氏には、深く感謝の意を表したい。

註

- (1) OECD Programme for International Student Assessment, Deta base.
- (2) Osmo Palonen, *Aspects of Musical Life and Music education in Finland*, The Sibelius Academy. Series of educational publications 8, Helsinki, 1993, P28.
- (3) 軍楽隊は存在しており、また個人教授も行われていたが、正式な教育機関としては当時の国立大学 (Imperial Alexander University in Helsinki) に一名、音楽教師が登録されているのみであった。
- (4) ジャン・ユリウス・クリスチャン・シベリウス (Jean Julius Christian Sibelius, 1865年12月8日—1957年9月20日)
- (5) 2005年には658のコンサート、イベントを開催している。
- (6) 後述 頁を参照のこと。
- (7) Nordplus スカンジナビア諸国を中心とした北欧地域の交換留学制度
- (8) ECTSの履修単位認定には国や教育機関によって今だにばらつきがあり、積極的な制度利用の妨げになっている。
- (9) アジアにおいては1991年に、アジア太平洋地域内において同様の目的をもった高等教育機関の協力を推進する組織、UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific) が設立されている。

- 全体目的：アジア太平洋地域内の高等教育機関間の協力を推進するとともに、学生と教職員の交流を増やし、高等教育の質を高めることによって、域内諸国・諸地域の文化・経済・社会制度の理解を深める。
- (1) 単位互換のためのガイドラインを作成、多国間交流の移行促進を図る。
 - (2) UMAP参加国の中で研究者データベースや留学生の情報等を提供、域内の大学間の交流を支援。
- (10) Licentiate とは現在ヨーロッパの若干の大学が Bachelor と Doctor の間においている学位。アカデミーでもこの学位を置き、Doctoral Study の中での Doctor の一段階前の学位としている。
- (11) 1 ECTS単位=26.7時間
 2 ECTS単位=53時間
 時間数によるECTS単位と学修量
 1年間=60単位=1,600時間の学修量（出席すべきレッスン+独立した学修と自習）
 8月1日から始まる授業：1単位=26.7時間の学修量（出席すべきレッスン+独立した学修と自習）
 古い授業：ECTS単位に転化される（「学修週間」かECTS単位による成績証明書）
 1時間=0.0375ECTS単位
 1 ECTS単位=26.7時間
 ECTS単位をどのように計算するか。例えば、160時間のコース=6単位： 160×0.0375 単位=6単位
 コースの時間数をどのように計算するか。例えば、8単位のコース=213.6時間： 8×26.7 時間=213.6時間
 コースの説明はコース期間に平均的な予想される独立した学修が自習ばかりでなく、出席すべきレッスンの数を述べている。
- (12) コンピューターベースの TOFUL で513点以上、ケンブリッジ CPE のA、B、C合格、あるいは IELTS 6 でもよい。
- (13) strategy2012 Sibelius Academy website より
- (14) ヴェリ=マッティ・プーマラ (Veli-Matti Puumala b.1963) は凝縮された密度の高い作品を書き続け、2005年8月からシベリウス・アカデミーの作曲教授に就任している。ヨヴァンカ・トロヴォジェヴィッチュ Jovanka Trobojevic (b.1963) は、彼女の出身地であるバルカンの音楽とモダニズムを融合させ、高い評価を得ている。ユッハ・タバニ・コスキネン (Juha T. Koskinen b.1972) はオペラ、室内楽、オーケストラに彼の才能と知性を充分に発揮し、数々の作品を世に送り出している。
- (15) Osmo Palonen, *Aspects of Musical Life and Music education in Finland*,
 The Sibelius Academy. Series of educational publications 8, Helsinki, 1993,